

## 枕草子の虚構性

——「笑ひ」と「あはれ」を中心にして——

川 藤 良 子

### 一 はじめに

無名草子以来、枕草子の中関白家没落による悲しみを描いていないと言われている。三田村雅子氏は枕草子を「定子後宮の記録である」とする石田穰二氏の論を「枕草子はあったことそのままの記録というにはあまりに偏向がありすぎる。」と否定し、枕草子は「理想追求の文学」であり「虚構的なあるべき姿が追求されていた。」と述べる。また、稲賀敬二氏は「清女はこの『絵に書き、物語のめでたきことにいひたる』世界以上の現実を、理想化して文字に定着させ、再現する能力を備えていた。」と述べる。たしかに両氏の論のように清少納言が没落期に悲しみなどの負の記述を避け、正を描き、さらに「笑ひ」を創出する場面も見受けられる。しかし、それは演技・虚構と言えるのだろうか。定子の周りを明るくし、定子を元気づけたという、中宮女房としての清少納言の自然な行動であり、女房としての記事選択の上の叙述

であったのではないか。

石田氏は負の記述を避けることは認めるが、その理由は三田村、稲賀両氏と異なり、以下のように述べる。一そこにあるのは正の世界だけで、負の世界はきれいに切り捨てられている。きびしい選択の目が働いていたと見るよりほかなく、定子が定子である所以のもの、中宮に体现されていた、作者にとって価値ある世界——それは女房にとって価値ある世界ということであるが——、それをしか作者は書こうとしないのである。『枕草子』を後宮の文明と見る所以である。<sup>5</sup>「本稿も石田氏のように、枕草子の選択は虚構のためでなく、女房として描くべきことのみを書くという当然の選択だったと考えている。記録係と考える作者は、男性の漢文日記のように、枕草子が前例として、後世に使用される可能性を認識していただろう。そうすると定子の辛い様子を書き残そうとはしないと考えられる。女房としての判断により、悲しみの記述を少なくしたり、そこから読者の視点をずらすという独特

枕草子の虚構性——「笑ひ」と「あはれ」を中心にして——

の虚構をする。しかしそれは、定子後宮の華やかさを強調するよ  
うな積極的虚構とは異なり、その意味で虚構性は薄い。石田氏の  
枕草子を「なまなましい記録」とする表現がふさわしいと考え  
る。以下、枕草子の独特の虚構性について、「笑ひ」と「あはれ」  
をもとに考察を進めたい。

テキストには渡辺実校注『新日本古典文学大系25 枕草子』一  
九九一年 岩波書店を使用した。同書は陽明文庫蔵本によってお  
り、歴史的仮名遣いと異なる場合は傍記があるが、本稿では便宜  
上、その注記を省略した。

## 二 「笑ひ」について

枕草子は斜陽の中関白家における暗の部分を除き、陽を描い  
たものであるとされている。陽を表す言葉として、「笑ひ」があ  
るが、その表現も、道隆が政治の中枢にいた華やかな時期と、道  
隆の亡くなった後の没落期では、質の違いが推察される。三田村  
雅子氏は盛時の笑いは「散発的」であり、没落期の笑いは、「語  
り伝え」、広まっていくものとする。原岡文子氏は没落期の笑い  
は「攻撃」であり、相手を排除するものであると述べる。たしか  
に生昌（五段「大進生昌が家に」）は原岡氏の指摘のように攻撃  
の笑いの対象にふさわしいかもしれない。病身の貴子を伊周が流  
罪先から密かに入京し見舞った際、道長に密告したと言われてい  
るからだ（小右記）。中宮のために四足門を作ったが、女房達の

通過する門は狭く、作者達は殿上人・地下人が見る中庭を歩かさ  
れる破目になり、「車いらぬ門やはある。見へばわらはむ」と  
言っている。また、作者の部屋に忍んで来た生昌を「かゝる見え  
ぬ物のあめるは」と同僚の女房達と「わらふこといみじ」く、ま  
た生昌の「ちうせい」との方言までも「笑ふも理り」としてお  
り、一見攻撃のようにも見える。しかし、定子を唯一自邸へ受け  
入れてくれた生昌への行き過ぎた攻撃は、定子サロン自体の破壊  
を招く危険性もある。前述のように原岡氏は枕草子の笑いを「一  
つの攻撃方法或いは武器」と表現し、枕草子を「凋落の現実の中  
にあってささやかな戦いを挑んだその軌跡」とする。そして定子  
の笑いを「温か」と除外した上で、その他の笑いについて「仲間  
意識」を得るための「攻撃」と続ける。しかし「攻撃」というこ  
とと「温か」な笑いとは関連が薄いように考えられる。同じ場で  
の共感の表われとは考えにくい。对生昌への笑いも「攻撃」とい  
う評言に当たっているかどうか。小森潔氏はこの章段の「場」に注  
目し、「生昌の統轄する〈場〉であったはずの生昌邸が、定子を  
中心とする〈場〉に組み替えられていく」と述べる。氏の指摘通  
り、生昌邸は定子中心の「場」になっている。ゆえに、女房達は  
多少のとげとげしさはあるものの、いつものように明るく振舞え  
るのである。そして定子は攻撃が行き過ぎないように、女房達を統  
制しているのである。

ところで、三田村雅子氏は没落期の笑いについて、清少納言の

働きに注目し、翁丸の段を挙げて以下のように説明する。

おまへにもいみじうちわらはせ給ふ。右近内侍めして、かくなんと仰らるれば、はらひのゝしるを、上にも聞しめして、わたりおはしましたり。「あさましう、犬などもかゝる心ある物なりけり」とわらわせ給ふ。(六段)

「翁丸事件の顛末は、清少納言の解説による定子の〈笑ひ〉、定子から右近の内侍への〈語り〉と〈笑ひ〉、右近の内侍から天皇に伝わって又〈笑ひ〉を生みだし、同時に主上付きの女房達にもその話が伝わって更に〈笑ひ〉を呼び、ついには、勅命によって犬を打擲した藏人忠隆にまでニュースが届いたのか、やってくるという次第で、狭い宮中社会での噂の伝播を、数々の〈笑ひ〉をたたみかけるようにして描き集約していく。」三田村氏は「〈笑ひ〉の媒介としての「清少納言」について「後宮に入ること拒まれた定子サロンの健在ぶりを、宮廷世論に訴え、印象づけていく」と続ける。<sup>10)</sup>

しかし没落期ではなく、清少納言も宮仕えしていない時代、もちろん作者が登場しない打ち聞きの章段でも、同様の構図を見ることが出来る(一二三一段「円融院の御はてのとし」)。一条帝と定子にからかわれた藤三位は笑って悔しがる。「語る」の語はないが、「上の台盤所にても」「局に下りて」のように藤三位が「語り」歩いて、その結果としてその場のものが「笑ひのゝし」る。後日談として大納言朝光も「語り」によって、「聞き」「笑ひ興

じ」ている。笑いが広がっている様子がよくわかる。この段には登場人物としての清少納言がないにもかかわらず、語りと笑いの構図になっていることに注目しなければならぬ。このように「語り」による笑いの伝播は没落期のみではなかったが、没落期にこそ、より重要であったことは疑いない。

また、三田村氏の指摘のような清少納言の「語り」による笑いの創造の作用は栄花物語においても確認することができる。

女房達とも物語しつつ、五節の所どころの有様など言ひ語るにつけても、清少納言など出であひて、少々の若き人などにも勝りてをかしう誇りかなるけはひを、なほ捨てがたくおぼえて、二三人づつつれてぞつねに参る。(巻第七とりべ野)<sup>11)</sup>

清少納言の創り出す笑いや明るい雰囲気、君達を呼び寄せていたことになる。宮廷世論に訴える力になったかもしれない。このように没落期で笑いを創出することは、定子サロンにおいて重要な意味があった。しかしそれは読者を想像しての作者の作爲的な行動ではなく、定子を元気づける行為だったのでないか。

また、そのように創出された笑いより、九五段のような笑いの方が枕草子らしいと考えられる。

只卯花の垣ねを牛にかけたるぞと見ゆる。供なるおのこどもも、いみじう笑ひつゝ、(略)(公信) あへぎまどひておはして、此車のさまをいみじう笑ひたまふ。(略)(清少納言)  
「(略)なき人のためにもいとをしう侍」とまめやかに啓すれ

ば、(定子) 笑はせ給て、「さらばたゞ心にまかす。われらはよめともいはじ」(九五段)

この段は定子後宮「らしき」に満ちている。まず、自然な「笑ひ」がある。次に女房である作者が主人である定子に「下手な歌では有名な歌人であった父がかわいそう」と主張し、本来の目的であった詠歌を辞退してしまうが、定子はこれを許諾する。その上で歌を詠めなかった作者を窘めるといふ定子のリーダーシップもある。

定子サロンはこのように、明るさに満ちた中にも定子の統制が行き届いたものだったと考えられる。盛時に定子が創り出し、出来上がった明るく自由な雰囲気は、没落期になり定子が明るい雰囲気を作り出せなくなると、清少納言ら女房達を中心となりその雰囲気を持してきた。女房達を中心になったこと、気を遣う上位者の存在がなくなったこと、清少納言自身がベテラン女房になっただけでもあり、没落期の女房達やその中ではほほ笑む定子の笑いは、より自然なものに見える。

七四段も定子サロンの自然な明るさ・自由な雰囲気がよく現れている。

「左衛門の陣にまかり見ん」とて行けば、我も我もとおひつぎて行くに、殿上人あまた声して「何がし一声秋」と誦してまいる音すれば、逃げいり、物などいふ。(略)夜も昼も殿上人のたゆるおりなし。上達部まで参り給に、臆気にいそぐ

ことなきは、かならず参り給。(七四段)

殿上人の声を誰の声か当てていた女房達は、しまいには左衛門の陣にまで出かけて行く。そんな定子後宮は、道長方が華やかな時期であるのにもかかわらず「夜も昼も殿上人のたゆるおり」がなく、上達部まで訪れる。皆が「臆気にいそぐことなきは、かならず参」るほどの魅力があったのだろう。

このような自由で明るい雰囲気描写は、枕草子が部分を選び集め、「虚構」の世界を作り上げたという印象より、むしろ暗い部分は包みながらも自然のままを描写したという印象を受ける。渡辺実氏の「笑ふということばがたくさん出てきて、孤独な涙というのはほとんどなくて、一緒になって笑いあうことが非常に多い、という『枕草子』の言語事実も、そうした女房衆たちとの共同の感覚のなかで、『枕草子』という作品が成り立っているからにはかならない」との論考のように、枕草子の笑いは開放的なものが本質であり、女房達との共感をもとに執筆したという性格があるからだと考えたい。たしかに笑いの創出のケースもあるにはある。しかし、九五段のように自然な笑い、自然な雰囲気を残しておき、それを共感してもらおうことこそ、清少納言の最も描きたかったところであろうと稿者には考えられる。

### 三 「あはれ」について

枕草子は中関白家の没落期に執筆されたにもかかわらず、明る

い印象を表す記述が多い。辛さを表す語として「泣く」が一九例、「あはれなり」が八七例使用されるが、「泣く」の主体は幼児である場合が多く、辛さを表すことは少ない。大人の涙は中関白家の盛時に感涙として多く現れる。「あはれなり」も「趣がある」の意で使用されることが多く、「かわいそう」の意での使用はごくわずかである。また「かなし」も使用されるが、六例と少ない上に、「かわいらしい」の意が四例であり、やはり悲しみを表す語が少ないことがわかる。

ところが、栄花物語では、中関白家没落の様子が細かく記され、定子もその様子を悲しみ、多くの涙をながしている。栄花物語で叙せられた多くの涙・悲しみは、枕草子では、少しの場面で、しかも短い表現に集約されている。また、作者は清少納言集では「涙」「泣く」を多用し、「のがるれど同じうき世の中なればいづくもなにか住吉の里」のように泣き言のような歌まで詠じるという一面も見せるが、そのような作者によって、涙・悲しみはどのように包まれ表現されたのであろうか。この章では、清少納言がどのように陰の部分を目立たないように叙してきたのかを探りたい。

作者はありのままを表現するにあたり、中関白家の悲しみを目立たなくする努力をする。その「あはれ」を包む表現方法としては、まず、言葉・文の短さが挙げられる。

二月廿日ばかりの、うらくとどかに照りたるに、渡殿

枕草子の虚構性——「笑ひ」と「あはれ」を中心に——

の西の廂にて、上の御笛ふかせ給。高遠の兵部卿、御笛の師にてもものし給を、御笛二つして高砂をおりかへしてふかせ給は、猶いみじうめでたしといふも世のつねなり。御笛の事なども奏し給、いとめでたし。御簾もとにあつまり出でて、見たてまつるおりは、「芹つみし」などおぼゆる事こそなけれ。(二二七段)

一条帝が得意の笛を習い、定子や作者達が見ている。長保二年二月のある一日で、一見穏やかだが、前年の一月に彰子が入内しており、長保二年二月二十五日に中宮になっていたので、まさに直前の出来事である。その緊迫感はたった一言「芹つみし」の引き歌で表される。俊頼髓脳などに見える古歌の「芹つみし昔の人もわがことや心にももの叶はざりけむ」(出典未詳)が引かれ、不遇を嘆く気持ちが見られる。しかし帝の笛を吹く姿を見て、「芹つみし」などおぼゆる事こそなけれ」と、否定形で表現されていることに注意しなければならぬ。「いみじうめでたし」という言葉では表せないほど素晴らしきとする賛美に、悲しみは巧みに隠されている。

次に「あはれ」は盛時の章段の中に隠される。枕草子での「泣く」「涙」の多くは中関白家盛時のものであり、感涙を表している。

「三位の君、宮の御裳ぬがせ給へ。この中の主君には、わが君こそおはしませ。御棧敷のまへに陣座据へさせ給へる。お

ぼろけのことかは」とてうちなかせ給。げにとみえてみな人涙ぐましきに、(略)(二五九段)

盛時の中でも特に華やかな積善寺供養の段に、「泣く」「涙」が重用される。そうした叙述の最後に執筆時の作者の歎息ともとれる一言が加えられている。

されど、そのおりめでたしと見たてまつりし御こともも、いまの世の御こともに見たてまつりくらぶるに、すべて一つに申すべきにもあらねば、ものうくて、おほかりしことどもも、みなとゞめつ。(同)

積善寺供養の日に作者が目にした「めでたしと見たてまつりし御ことも」は、今のご様子と比べると「ものうくて」もろもろ書き漏らしたとある。しかし、盛時の極みであり、沢山の華やかな記事を叙した最後の数行の記述なので、注視しなければ作者の「あはれ」に気付かれない書き方である。やはり「あはれ」は包まれていると読み解きたい。

さらに「あはれ」は「笑ひ」の章段の中にもひっそりと存在する。例えば七九段。注意深く読まなければ分からない悲しみだが、喪服を表す語に留意しよう。

おほかた色ことなる比なれば、あるかなきかなる薄鈍、あはひも見えぬきはきぬなどばかりあまたあれど露のはえも見えぬに、おはしまさねば裳もきず桂すがたにてるたるこそ、物そこなひにて口惜しけれ。(略)「まづその事をこそは啓せん

と思ひてまいりつるに、物語のことにまぎれて」とて、ありつる事共きこえさすれば、「たれも見つれどいかう縫ひたる糸、針目までやは見とをしつる」とて笑ふ。(七九段)

「色ことなる比」で「薄鈍」を着ていることが斉信の手前恥ずかしいというが、喪服に表れる悲しみが、斉信の着物の「縫ひたる糸、針目まで」観察するファン心理に隠されている。

そして、「あはれ」を口にしながらも、作者個人の悩みに話題を変え、印象を薄くしている章段がある。一三六段に「世の中にこと出でき、さはがしうなりて」と道隆死去の後の政変を表す記述がある。

殿などのおはしまさでのち、世の中にこと出でき、さはがしうなりて、宮もまいらせ給はず、小二条殿といふ所にをはしますに、なにともなく、うたてありしかば、ひさしう里にゐたり。御前わたりのおぼつかなきにこそ、猶えたへてあるまじかりける。(略)御けしきにはあらで、さぶらふ人たちなどの、「左の大殿方の人、知るすぢにてあり」とて、さしつどひ物などいふも、下よりまいる見ては、ふといひやみ、放ちいでたるけしきなるが、見ならはずにくければ、「まいれ」などたび／＼ある仰せごとをも過ぐして、げにひさしくなりにけるを、又宮の辺には、たゞあなたがたにいひなして、そら事なども出でくべし。例ならず仰せごとなどもなくて日比になれば、心ぼそくてうちながむるほどに、長女、文を持

てきたり。(略)胸つぶれてとくあけたれば、紙には物もかゝせ給はず。山吹の花びら、たゞ一重をつゝませ給へり。それに、いほでおもふぞとかゝせ給へる、いみじうひごろの絶間なげかれつる、みななぐさめてうれしきに、(二三六段)

「御前わたりのおぼつかなき」ことより清少納言自身の「うたて」が強調され、世の中が「さはがしう」なったことを目立たなくしている。作者は「左の大殿方の人、知るすぢにてあり」と、道長方についてはないかと噂される。女房達に今までにない態度を示され、悩む作者だが、「御けしきにはあらで」とあるように定子にはそのような態度はない。作者が引きこもる実家に「いほでおもふぞ」との直筆の手紙を届けさせる。読者は政変を忘れ、定子と作者の絆の強さに目を奪われることだろう。

二五八段(「御前にて人ぐども」)には「心から思乱るゝ事」というかなり明確につらい感情を表す言葉がある。政変を思わせる「世中のはらだゝし」さをさりげなく述べているが、その言葉は作者自身の問題であるかのような「心から思乱るゝ事」という語に置き換えられる。また、「ほどへて」後、定子が作者の欲しがっていた「めでたき紙」を本人でさえ忘れていたのに「おぼしをかせ給へりけるは、猶、たゞ人にてだにおかしかべし」と見事に定子賛美の章段になってしまっている。

そして、翁丸の章段(六段「うへにさむらふ御ねこは」)(前記)にも「涙」の記述があるが、犬を主人公にし、コメディタツ

チにすることにより、悲しみは包み隠されている。

以上のように「あはれ」を包んできた作者であったが、「気の毒である」という意の「あはれなり」を定子の乳母が日向へ下向する折の定子に対して使用していることが注目される。

京のさるべき所にて雨いみじうふりたるに、

あかねさす日にむかひても思いでよ都ははれぬながめすらんと

御手にてかゝせ給へる、いみじうあはれなり。(二三三段)

斜陽の中でも、中宮の素晴らしさのみを描いてきた作者だったが、華やかさが日々失われ、ついに乳母まで去ってしまうという境遇の定子に対して、この一箇所のみ「気の毒」の意で「あはれなり」を使用する。この前段の二三二段も、「あはれなり」との明記はないものの、不遇な定子の様子を描く数少ない章段である。

二三二段(「三条の宮におはしますころ」)では、彰子が中宮となった結果として皇后となっていたが、兄弟の左遷、自身の出家の中で第三子を懐妊するという心細い状況だった。渡辺実氏は、「これ、籬越しにさぶらふ」と作者が青ざしを差し出した言葉は古今和歌六帖「ませ越しに麦はむ駒のはるばるに及ばぬ恋もわれはするかな」を引いており、清少納言の定子に対する「おそれながらお体を案じております」の意を託したものとされる。節句の華やかな中で定子のつらい気持ちを推し量り、定子も「わ

が心をばきみぞしりける」と心の内を見せている。

このように枕草子にも「泣く」「涙」は使用されるが、むしろ「をかし」「笑ひ」のような明るい印象が目立つのはなぜだろうか。六段では、翁丸を主役にしハッピーエンドで終ることによって印象を明るくしている。青ざしの段（二二三段）、乳母の日向下向の段（二二三段）は連続しているものの、それぞれが短く、読者に定子の境遇を思い出させる時間も短くなる。二二四段（「清水にこもりたりしに」）では、「あはれ」のない普通の贈答に戻っている。「あはれ」はまちがいなく枕草子を貫く幹でありながら、明るさの中に時折現れるという構造になっている。その構造がより明暗を際立たせることもあるが、全体として枕草子の明るい印象を保つ要素になっている。

以上のように、枕草子では「あはれ」や「悲しみ」は目立たないように工夫されている。枕草子の基調となるものはやはり「をかし」であるからだ。枕草子はたしかに「いはで思ふぞいふにまされる」のように、記述しないことにより、「まされる」「あはれ」を表現したとも考えられる。が、やはり枕草子には負から正へ、陰から陽へ働く内的力がある。枕草子の主調は、あくまでも長調（明るい印象の音調）なのである。しかし、中関白家没落を直視して、すべての「あはれ」を省くと全くの虚構になってしまう。それでは清少納言が描きたかった定子後宮の雰囲気も自然なものにならなかつただろう。作者は「あはれ」を描くが、それを

目立たなくするため、このように構成や主題の選び方に気を配った。読者の視点をずらすことによって「あはれ」をどこかに感じながらも没落・悲哀を感じさせない明るさに満ちた作品が書き上げられたと考えられる。

#### 四 虚構

以上の考察によって、清少納言は「あはれ」を包みつつも、完全に省くことはしなかつたと了解される。清水好子氏は「定子の居所が職の曹司であることを明らかにするのは、主人の置かれた境遇がいかなるものであったかを一言で示すものである。」<sup>15</sup>と述べる。「母屋は鬼あり」とも言われた職の御曹司に定子が住むことは尋常ではなく、「あはれ」深い記述であるが、作者は省かなかつた。それは清少納言の虚構意識の低さによると考えることができる。栄花物語中の記述からも貴公子達が清少納言に魅かれ、定子サロンに集まってきたことがわかり、定子の周りを明るくしていたことは、紙面上のみではなく、作者の実際の言動と考えられる。紫式部日記における彰子サロンの女房と比較するとよりよく了解される。積極的な女房が少なく、彰子も「かうしてもあらなむ」<sup>16</sup>（積極的であってほしい）と気にするほどで、そのことによつて退出してしまう公達もいた。他方清少納言を第一人者とすする明るい雰囲気<sup>17</sup>の定子サロンには公達が頻繁に訪れたのである。

また、清少納言に虚構意識が少ないことは、大部分の読者で



あつたはずの定子方の女房達の視線を気にせず、道長に対する記述を削っていないことから窺える。盛時の記述ではあるが、作者は定子に「例の思ひ人」(二三段「関白殿、黒戸より」)とからかわれるほどの道長ファンであつた。二五九段では一度人目に触れた下襲を着るわけにはいかないと、道長が新たに下襲を縫わせた。それを待って定子の出発が遅れたのだが、定子も「いとすきたまへりな」と道長のお洒落を笑っている。このような記述を作者は省かなかつたのである。「左の大殿方の人、知るすぢにてあり」に表れるように、道長方、定子方という明確な意識があつたにもかかわらずである。まず、没落期においても道長にあらがれる気持ちが残っていたと考えられる。実際に清少納言は長い里居の時期に道長方に出仕するか思案していたと言われる。道長が清少納言に注目したのは、彼女が貴公子達を集める魅力があつたことのみならず、元輔の娘であることが大きいと考えられる。道長が敦成親王御産後に内裏へ戻る彰子に贈つた本の中に元輔集が入っていることからそのことは推察できる(紫式部日記)。

そして、道長の記述を削らなかつた理由に、中関白家再興に対する諦念の気持ちもあつただろう。作者は数々の政治的闘争を、宮仕え前とはいへ、知識として知っていたはずである。まず、道隆の政治では兼家に可愛がられた長男道頼を疎外したことや、外戚である高階家を重く用いすぎたことで、世間の反発があつた。清少納言は政変の舞台である宮中において、様々な噂が耳に入って

いたことだろう。また、定子没後の寛弘八年ではあるが、行成は日記にこのように書いている。「但故皇后宮外戚高氏之先、依齋宮事為其後胤之者、皆以不和也、今為皇子非無所怖、能可被祈謝太神宮也。」<sup>17</sup>行成は敦康親王の立太子問題の折に高階氏は業平が伊勢齋宮と密通してもうけた高階師尚を祖先とするため、「参宮」を拒否される立場にいるため王位には適さない、と天皇に奏上している(保立道久氏<sup>18</sup>)。素性の是非はさておくとして、当時の人々にこのように思われていたことは考慮すべきである。

伊周の世を治める能力の不足にも、作者は気付いていたかもしれない。彼は容姿が美しく漢才にも優れていたが、政治力がなかった。道隆没後に伊周が最初に出した政令は、小右記によると、着物や袴の丈の伸縮を示したものであつた。一長徳元年七月十五日、御衣袖令縫縮給事、公卿衣袖同前、依宣旨也、一尺八寸<sup>19</sup>。「伸べ縮め」の政令は道隆の喪中さして必要のない政令で世間の批判が集まつた。そして、出家してもなお、一条天皇の寵愛を受ける定子への世間の批判もあつただろう。小右記(長徳三年六月廿日)には天皇のもとに参内する定子を「甘心せず」と人々が噂する様子が記されている。

道長の記述を避けなかつた最大の理由は、こうした伊周批判も受け入れる他ない作者にとって「あはれ」を避けなかつたのと同様に、避けてしまうと「虚構」になってしまうと考えたからではないだろうか。また、作者は「虚構」の目的と考え得る、中関白

家再興の可能性の低さを以上の理由からよく承知していたため、「虚構」する必要はなかったのである。作者はあくまでもありのままを書き残しておきたかったのだと考えられる。

ところで、「あはれ」と同様な構成は批判意識・政治的関心を記述する中にも見ることが出来る。前述のように清少納言には中関白家、道長方を問わず批判意識があった。しかしその語はごく短い言葉に集約されている。小白河の八講の場面（三二段）では、「左右のおとゞたちををき奉りて」に注目したい。

小白川といふ所は、小一条大将殿の御家ぞかし。そこに上達人結縁の八講し給。（略）左右のおとゞたちををき奉りては、おはせぬ上達人なし。（三二段）

この翌日に花山天皇が出家するという政変がおきるが、事件は当時の右大臣兼家の計略だった。右大臣の欠席にはこのような事情があった。短い記述ではあるが、大きな一言である。

清少納言は自分と同等の受領階級を低く見ることが多いが、九一段（「ねたき物」）では受領の視線に戻り、身分による上位者への批判意識が現れている。権門の家の下僕が失礼なことを言うが、こちらの地位が低いために言い返せない。この後の記述は男女間のやりとりめいてくるので、批判意識は目立たないが、清少納言の肉声が聞こえたように思う。

このように、「あはれ」はもちろん、批判意識、政治的な話題は女房日記の話題選択としてふさわしくはない。しかし、できる

だけそのままの形で残しておきたかった彼女は、省くのではなく、短い言葉に集約するという方法をとったのである。

また、虚構性の低さは清少納言の性格にも関わりるところだったのであろう。「いみじう寒」い冬に、「世にしらずあつ」い夏を望んでいくことから（一一三）段「冬は」はっきりしていることがよくわかる。清少納言は日常「すべて、人に一におもはれずは、なにかはせん。只いみじう中中にくまれ、あしうせられてはあらん。二三にては死ぬともあらじ。一にてをあらん」と口にしてきた。さすがに定子の寵愛に関しては「九品蓮台の間には下品といふとも」と控えめだが、定子に「第一の人に又一に思はれんとこそ思はめ」と言われてしまう（九七）段「御かたぐ、君だち、上人など」。それはまさに清少納言の望みのすべてであり、宮廷での約十年はそれがかなった日々であった。宮仕え前、「はつかに見」ていた「九重」で「ならず」ことができた日々であったのだ（二）段「比は正月」。

清少納言は「第一の人に又一に思はれ」た日々をそのままの形で残しておきたかったと考えることができる。語りによって笑いを広めたのもつらい思いをしている生身の定子を少しでも力づけたかったのではないだろうか。悲しみを包んだ文章構成や記述も、借景や生け花のように、自然を切り取り、より自然な形——超自然——を叙述する方法となっているのではないか。それは虚構とは呼べないと考える。本稿では、そうした枕草子の叙述態度

を「包む記録」と規定したのである。

注

- (1) 石田讓二「枕草子の美意識」『国文学』六月号 第十二卷 第七号 特集 枕草子の世界』一九六七年 学燈社。
- (2) 三田村雅子「〈語り〉と〈笑ひ〉——伝達と距離——」『枕草子 表現の論理』一九九五年 有精堂。
- (3) 三田村雅子「枕草子の虚構性」『枕草子講座1』一九七五年 有精堂。
- (4) 稲賀敬二「同時代人の見た枕草子」『国文学』六月号 第十二卷 第七号 特集 枕草子の世界』一九六七年 学燈社。
- (5) 石田讓二訳注『新版 枕草子(上)』一九七九年 角川書店。
- (6) (1)と同じ。
- (7) (2)と同じ。
- (8) 原岡文子「『枕草子』日記的章段の「笑い」をめぐって」『日本文学研究資料新集4 枕草子・表現と構造』一九九四年 有精堂『源氏物語 両義の糸』一九九一年 有精堂より再録。
- (9) 小森潔「異化するテキスト枕草子——大進生昌が家に」をめぐって——『枕草子逸脱のまなざし』一九九八年 笠間書院(初出は『日本文学』一九九三年)。
- (10) (2)と同じ。
- (11) 山中裕 秋山虔 池田尚隆 福長進校注『新編日本古典文学全集31 栄花物語①』一九九五年 小学館。
- (12) 渡辺実『枕草子(古典講読シリーズ)』一九九二年 岩波書店。
- (13) 萩谷朴『清少納言全歌集 解釈と評論』一九八六年 笠間書院。
- (14) 渡辺実校注『新日本古典文学大系25 枕草子』一九九一年 岩波書店。
- (15) 清水好子「紫式部と清少納言」『鑑賞日本古典文学 枕草子』一九七五年 角川書店。
- (16) 山本利達校注『新潮日本古典集成 紫式部日記 紫式部集』一九八〇年 新潮社。
- (17) 増補「資料大成」刊行会『増補資料大成5 権記』一九六五年 臨川書店。
- (18) 保立道久『平安王朝』一九九六年 岩波書店。
- (19) 東京大学資料編纂所『大日本古記録 小右記』一九五九年 岩波書店。

枕草子の虚構性——「笑ひ」と「あはれ」を中心に——